

はじめに

日本人が日本の歴史や文化を、そして日本美術を顧みなくなつたのはいつ頃からだろう？ このことは、私自身が海外に住み始め、外国の美術品オークション会社で日本美術の取り扱いを生業とし始めた頃から、時折思う間いである。

さて、この本を手にとって下さった皆さんの中には、学生時代に「日本史」を学ばなかつた人も多いだろうし、ましてや「日本美術」を学んだ人など皆無に近いに違いない。その理由は、戦後日本の「社会科」教育が日本史・世界史・公民・地理などからの選択制になつたことや、芸術教育でも音楽なら能の謡曲や長唄、詩吟よりもモーツァルトやバッハ、美術でいえば雪舟や運慶よりはミケランジェロやピカソ、といった西洋芸術中心だった事実にはかならないと思う。

もうひとつの教育上の問題点は、日本人でありながら、実際に日本の芸術に肌で触れる

機会が極めて少ないということだ。歌舞伎や能の鑑賞体験は年一回あればよいほうだし、日本舞踊や和楽器、茶道の体験も、少ないといったレベルではない。そして私から見た外国教育との大きな差異は、美術館や博物館での鑑賞、あるいは模写やレクチャーの少なさだ。ルーブル美術館やメトロポリタン美術館に一度でも行ったことのある方なら、そこで普通に行われている子供たちへのレクチャーや、模写をする青年、「本物」を前にレクチャーを聞く学生たちの姿を目にしただろう。日本の美術館・博物館の「常設展」がいつもガラガラなもの、その象徴的な現象に違いなく、これが先述した私の問いへの答えのひとつかも知れない。

かくいう私自身も、子供のときから普通の人より余程日本文化を学ぶことができる環境にあつたにもかかわらず、あるときまで日本の文化芸術を嫌悪し、外国文化に耽溺^{たんでき}してきただ人間だった。そんな私が日本の文化芸術、特に日本美術が世界のいかなる美術にも引けを取らず、个性的で、そして何よりも「日本人の日々の生活」に密接に寄り添って蓄積された芸術であることを知ったのは、大人になって外国人を含めた多くの方によりその素晴

らしさを教えられ、長く外国に住み、外から日本を眺めてからのことである。

実は私の眼を初めて日本美術に見開かせたのは、私が父に付いてニューヨークに住んだときに出会った、有名美術館で日本美術を担当するアメリカ人学芸員で、欧州・アジア・中近東などの世界最高峰の美術品を収蔵した美術館を父と訪ね、膨大なコレクションを観ながらふと常々思っていた疑問をその学芸員に投げかけたときだった。

「こんなに世界のトップクラスの美術品を収集している貴館に、どうして日本美術だけの展示室があるのですか？」

すると彼女は呆れたように、

「あなたは日本人なのに、そんなこともわからないのですか？ 日本美術は、日本人が長い間その美意識を身近な『道具』に込め、大事に育んできた物で、その品質は世界のいかなる一級の美術品にも引けを取らないからですよ」

と答えたのだった。

その答えは西洋文化万歳だった人間にはかなり衝撃的で、大国アメリカが戦争でコテンパンにやっつけた東の果ての島国の美術品を、お金をかけて買い、補修し、収蔵し、展示室を作り、世界中の人々に見せている。なのに、日本人の私はその価値を知らない……これはある意味、戦争に負けたことよりも「恥」なのではなからうか？と正直思ったのだが、皆さんだったらどう思われるだろう。

この本は学者でも物書きでもない、ただ長い間外国で日本美術品を観て扱ってきた私が、日本美術への興味を持ち始めた方に開ける「窓」的な本で、その動機は、せっかく日本に住んでいるのに、これだけ世界でトップ・クオリティと評されるアート「日本美術」を知らない、見ないということは、短い人生の経験としてあまりにも勿体ない^{もったい}のではないか？と思ったからだ。そして本書の内容は、いろいろな切り口でポイントを整理した構成を心掛け、

一、日本人が知って損のない、

- 二、日本人の日々の「生活」に寄り添ってきた、
- 三、それゆえ、時にはアカデミックな美術史からはかけ離れた物も含んだ、
- 四、長い日本美術品の歴史から選んだ作品たち

をカジュアルに解説したつもりである。

もし本書を読んで下さった皆さんが、少しでも日本美術への興味を広げ、専門書を買って読んだり、国内外の博物館や美術館、寺社や能楽堂、歌舞伎や茶会に「日常の出来事」として足を運んでみよう、ひいては自分の家でささやかな日本美術品と暮らしてみよう、などと思って頂いたとすれば、これ以上の喜びはない。

目次

はじめに

3

第一章 日本美術とは何か

13

誰が・どこでつくったかという視点

舶来文化と「日本の美」の関わり

大陸文化を「和の美」に昇華する① 「和魂漢才」の仏教美術や山水画

大陸文化を「和の美」に昇華する② 「和魂洋才」の南蛮美術

大陸文化を「和の美」に昇華する③ 焼物や絵画に見る外国文化の「和様化」

日本人に愛されることで日本美術品となった異国の工芸品

西洋の審美眼により「発見」された日本美術

「道具」が和の美を醸成させた

継承される技術と美意識の日本的世界

アルチザンという名のアーティスト

骨董品と古美術品は違うのか？

第二章

日本美術の妙なる仕掛け

日本美術「再発見」のキーパーソン① 近代化・国際化を成し遂げた岡倉天心
日本美術「再発見」のキーパーソン② 日常の生活道具に美を見出した柳宗悦
日本のオリジナルな美① 浮世絵に見る、写実よりもリアルな世界
日本のオリジナルな美② 織部茶碗のアシンメトリーな魅力
日本のオリジナルな美③ 武士たちが身にまとった精緻な美
日本のオリジナルな美④ 経年変化が醸す味わい
「割れた茶碗」なのに、なぜ高いのか？
日本美術は世界に通用する本物の教養

日本美術のダイナミズム——ミニマルな美から装飾的な美まで

「自然⇨神仏」の感覚が美をもたらす

余白が生む美 気配から匂い立つ美

日本美術のここを見よ！① 絵画の筆遣い、構図、そして色彩の妙

日本美術のここを見よ！② 掛軸の陰の主役 表具の芸術性

日本美術のここを見よ！③ 名彫刻が持つ「彫り」のシャープさと精神性

第三章

私を選ぶ一〇人のアーティスト

日本美術のここを見よ！④ 陶芸は地域や時代による違いを味わう
日本美術のここを見よ！⑤ 漆芸の歴史が伝える実験精神
日本美術のここを見よ！⑥ 武家社会の終焉が生んだ「超絶技巧」
日本美術のここを見よ！⑦ 書は時代の心を映す
現代に生きる新工芸系アーティストたち

1. 千利休【コンセプトチュアル+インスタレーション】
2. 本阿弥光悦【マルチ】
3. 運慶【彫刻】
4. 一休宗純【書】
5. 長次郎【陶芸】
6. 小川破笠【漆工】
7. 東洲斎写楽【版画】
8. 葛飾応為【絵画】
9. 並河靖之【七宝】

第四章 日本美術の死角 過小評価の作品たち

「怖さ」を帯びた大正時代の美人画

侮るなかれ、超絶技巧の明治工芸

刺繍絵画の一針一針に込められた精神性

明治工芸に見る「やり過ぎ感」の魅力と熱量

百五十メートルの移動のために一万キロを旅した《洛中洛外図》

独断で選ぶ、次世代の日本人現代美術家一〇選

123

第五章 死ぬまでに見ておきたい日本美術一〇〇選

おわりに

249

151